

# 翻刻『俳諧歳時記』(十)

## 播本眞一

### はじめに

本稿は、「翻刻『俳諧歳時記』(一)」〜「同(九)」に続き、  
曲亭馬琴(一七六七〜一八四八)が享和三年(一八〇三)に  
刊行した『俳諧歳時記』(二卷二冊、横本)を翻刻するもの  
である。今回は紙幅の都合で、下冊「秋之部」百五十三丁オ  
モテ六行目から同百七十七丁ウラ五行目までを対象とした。凡  
例などは前記拙稿(一)を参照していただきたい。

### 『俳諧歳時記』翻刻

俳諧歳時記秋之部 江戸 曲亭主人纂輯

穂屋 御狭山祭に造る穂屋也。この祭、貞徳説には八月也。

『藻汐草』には七月廿日とす。『増山井』には七月廿七日といふ、此説多し。廿七日にしたがふべき歟。むかしは勅使を立

らる。かの穂屋といふは、勅使尊敬の為、新に仮屋を設たる也。今もその余風にて穂屋を造るとぞ。『新式秘抄』に云、穂屋つくるは諏訪祭のこと也。すは祭は年に七十五度あり。はその一ツ也。みさ山は山城笠取の近所也といふ説あれど、『名所方角抄』『歌枕秋の寝覚』等には信濃とす。『春雨抄』に、刈てほすほやのすゝきのみさ山にかまはやふさやみたかなるらん。角觥〔漢書〕部領使〔万葉〕○童相撲、辻角力。○両々相当て力を技藝・射騎に觥(百五十三才)戲とす。故に角觥といふ。〔漢書注〕角觥は相撲也。〔指南〕壮士裸袒相搏て勝負を角す。每群戲既に畢れば、左右軍太鼓を雷してこれを引ク。豈角力伎の遺耶。〔文獻通考〕『史記』秦の二世、甘泉宮に在りて楽を角力戲・俳優戲をなす。漢武帝、この戲を好む。即チ今の相撲也。〔事原〕『垂仁紀』に、大和国当麻蹶速と出雲国野見宿禰と力を撲しむ。蹶速、野見に勝ツこと能ず、その腰を踏折られて死せり。野見は菅家の

祖也。○柏原天皇の時より、代々の天子皆悉相撲を好む。貞観以後、寂然として無事也。今聖主これを捨ず。又棄しからずや。「扶桑略記」先ツ二三月の頃、大将以下、陣の座に於て、相撲使のことを定む。諸国七道に遣して相撲人を召す。これを部領使といふ。「公事根源」に云、「江次第」に仁寿殿東庭の相撲とあり。裏書に云、南殿出御のとき、仁寿殿に於て召合の抜出等あり、是は諸国の供御人へ供御人は相撲を奉行する人、すなはち諸国の防人也」を召集めて、七月に相撲の節とといふて、天子の御覧する也。先ツ十六七日の間に召仰あり。上卿、勅を奉りて、左右の次將に相撲あるべきよしを召仰らる。左右の近衛方を分ちて国々へ使を（百五十三ウ）下して相撲を召す。これを『万葉』にことり使といへり。廿六日に内取といふことあり。仁寿殿「江次第」裏書に云、大の月は廿六日、小の月は廿五日、仁寿殿の東庭に於てこれを行ふ。御物忌のとき、清涼殿においてこれあり。近年御物忌を申すときの義といふ也。内とりはならし也。左は左、右は右との角力なり」に出御なる。左右の角力人へ東庭於て角力十五番、もし故障あるときは仰に隨て進止す。犢鼻の上に狩衣を着て「延元三年『江記』に云、角力人三十人、次第行列。その装束、烏帽子・狩衣・犢鼻褌也。差紐・狩衣の上に帯を着、下衣・袴を着す。徒跣左右おのく三十人なり」一度に角力とりて勝負あり。廿八日「大の月廿八九日、小の月廿七八日」召合せあり「裏書に云、召合拔出

は、左右相撲相合也。『江次第』に云、勝方乱声、員による。左勝は抜頭、右勝は納曾利、均も奏す。往年最手時を決す。左員勝、右員勝のときは、右先ツ納曾利を奏す、左陵王を奏す。又せんけいあるときは他の舞を奏す。天子南殿に出御、王卿参上す。大将、相撲の奏を執る。十七番取て勝方乱声あり。又廿九日、抜手とて角力をすぐりて御覧せらるゝ也。神龜三年に始りて諸国より召上せらる。寛平七年には童相撲を御覧あり。すべて角力の起りを申に、『日本紀』垂仁天皇七年七月、当麻邑に勇士あり、二云云。○延喜元年七月廿八日丁丑、童相撲二十番を御覧、綾綺殿に於てこの事あり。「扶桑略記」延長六年閏七月、童相撲終りて舞を奏す。「古今著聞」助手、最手、加手など、みな相撲にいふ所也。助手、これを脇といふ。「江次第」二見えたり。今、関脇などいふ。これらより名を設たる歟。辻相撲は（百五十四オ）公事にあらず。何方にもあるをいふ。今の相撲の類也。これも内裏の角力に准じて秋とす。凡相撲の勝負を定る者を行司といふ。その法、三流あり。播州、東坂本、西岡是也。又相撲の魁首を関といふ。次を関脇といひ、又その次を小結といふ。その余はみな前頭といふ。是今の相撲の称呼なり。角力とりならばや秋のからにしき、嵐雪。鍛冶が子をこよひもまつや辻相撲、柳居。鳩吹。獵師の鹿をまっつに、人を呼んとも、又人に鹿ありとしらせんと思ふにも、手を合せて吹くを鳩吹とはいふ也。鳩といふ鳥の鳴くに、鹿の声の似たるゆゑ也。又秋と

しもよめるは、鹿の秋は妻をこふる物なれば、笛鹿とて、笛にて鹿の声をまねびて、我はかくれて待ことのある也。「奥義抄」鳩ふく秋、是仲実が歌也。狩をするに、手にて鳩のまねをする也。「八雲」狩人の鳩をとらんとて、手を合せて鳩のまねをして吹くをいふ。「歌林良材」鳩をとるとて、まねをする也。又鹿をとる時の事なり。「藻汐艸」秋さかりになれば、人鳩のまねをして、手を合せて鳩の声のやうに吹ならず也。「袖中抄」諸説此の(百五十四ウ)如しといへとも覺束なし。又一説に、鳩吹は鷹をとるにや、人鳩のまねをして欺きみちびけは、鷹ばかされてとらるゝをいふといへり。此説よろし。亦紹巴説に、鳩ふく風とは西風をいふよしいへり。今按ずるに、『堀川』、まぶしさすさつをの身にも堪かねて鳩ふく秋に声たてつ也、仲実。前の説ニはみなこの歌にて注せられたるなり。又、『拾玉』、五月雨にふりしむ空も哀れ也はと吹秋の風ならねとも、慈鎮。西風をいふといへる説は、この歌より思ひ設たるなるべし。しかればはつと吹く風にて、鳩の意にはあらざるにや。花火 夏たるべきを古人秋とすることいまた 詳ならず。漢にはこれを龍火といふ。その製、原は炮より出たり。扇おく 団扇置ク 又わするゝといふも秋也。漸く秋冷になりて扇うちわを忘るゝ也。稻妻 稲のみのる頃、しばく電のするをいふ。雷は雑也。もゝかぶり 稲つまをいふ。糯米 田畑の虫送り 楸 楸俗これをはぜといふ。檀 楓 柞 柞の森は山城にあり。

雑也。(百五十五オ) 萩 蘆荻なり。水辺に生ず。萩糸 萩、もとあらの萩、萩殿、萩の戸、さくれ萩、萩の錦。○さくれ萩は葉の細なるをいふ。萩の戸は禁闕中にあり。鹿鳴草 「和名抄」芳子 「万葉」芳宜草 「和名」萩は蒿の属也。しかれども誤り来ること久し。○古枝草 ○紅艸 ○野守草 ○月見草 ○ねから草 ○しかな草、以上萩の異名也。秋海棠 蘭 藤はかま。桔梗 沢きゝやう、ひとへ草(同上)、又さちこう。○阿里乃比布木。「和名抄」牽牛花 薺をあさかほとよむは誤也。薺は木属にして草にあらず。陶隱居が『本草注』に云、牽牛子、此田舎より出ツ。凡人これをとり牛を牽て薬に易、故に名づく。女郎花 「白氏文集」茶花 仙翁花 観音草 翁草 本字は白頭翁、葉は芍薬のごとく花は槿に似たり。「本草」薬師草 弟切草 (百五十五ウ) 薬師草也。伝いふ、花山帝の朝に鷹飼あり。名を晴頼といふ。その業に精こと恰神の如し。鷹傷ことあれは、一草葉を採て以これに傳。その疵忽ち愈。秘してこれを伝はず。家弟あり、私にこれを洩す。晴頼怒て家弟を殺す。こゝに於て人、鷹の良葉を知る。是レよりその草を弟切草と号。青葉 弟切草也。鷹に飼ふよりの名なるべし。『鷹三百首』に定家卿の歌あり。鳳仙花 益母草 旋覆花 野菊 鬱金の花 荖荷の花 灸花 千梅が『箋鑑論』に云、嫩なる蔓草に花ひらく、色白く内微しく紅也。茎付の方を上にして、手足或は頬に点すればさながら灸

の如し。小兒、戯にその花を身に点して灸に擬、故に名づく。

すまひ草 曼珠沙花 桃の実 金桃 日本金桃あり。其実

重一斤。『述異記』木桂 俗これをはちすといふ。薏苡仁

蜀漆の花 (百五十六オ) 木瓜の実 蓮実飛ぶ 槐の花

棗 刀豆 渋柿 渋とる、新渋。夕かほの実 青瓢箪

百生ひやうたん、千なり瓢箪。狼尾草 秀て成らず。巖然

として田にあり。故に守田翁の称あり。荃葉穂ともに粟の如

し。紫黄にして毛あり。荒年採て食とす。秣 粟奴

粟の苗の穂をなす時、黒煤を生ずるをいふ。稲葉の雲 稲

の穂の出そろひたる也。稲の花 穂をいふにや。いねの花

の題に穂をよみたるおほし。○富貴艸○とみくさ○とろみ、

以上稲の異名也。稲むしろ 稲の穂なみの青々たるが莖を

布ならべたるやうに見ゆる故にいふ也。又新葉にて織たる莖

をもよめり。又かけ稲とて、木の枝などへかり稲をかけた

したるをも稲莖と詠り。『万葉』、玉はこの道行つかれ稲むし

る敷ても人を見るよしもかな、人丸。『六帖』、稲むしろ川そ

ひ柳水ゆけはおきふしすれとそのね絶せず。(百五十六ウ)

『新古今』、あらし吹岸の柳の稲むしろおり敷浪にまかせてそ

見る、崇徳院。『同』、秋の田のかりねの床の稲むしろ月やど

れともしける露哉、大中臣定雅。大かたこれらにてこゝろう

べし。中の二首は柳を稲葉のそよくに見たるとも聞ゆ。早

稲 室早はせ 今式に、五畿内にて苗代の床を室といふ。早稲を田に移す時、室に引残したる苗はやくみのると也。

是室の早はせならんと老圃いへり。又『和歌八重垣』に、室

とは稲の名なり。こといねより早くみよめる稲也。よみ方早苗

にも詠り。『堀川百首』に、田子のとる早苗を見れば老にけ

りもろてにいそけ室の早わせ『わくかせ輪』『いと切齒』の

説、これを略。二百十日 立春の日より二百十日め也。

この頃秋の最中にて金気殺伐の気変動する也。故に必ス風雨

あり。この節中稲の花さかりとす。農民その花を損はんこと

をおそる。又二百廿日は晩稲の花盛とす。二十六夜待 江

戸の俗、今月廿六日の夜、月の出に三尊仏の影向を拝むとて

田安の台、神田・湯嶋の社地、江戸見坂、品川、高輪等に群

集す。虫壳、果、飴、餅、いろくくの商人来りて賑へり。

俗伝に、この夜の月中三尊仏の影向(百五十七オ)ありとい

ふ。その実は月華なり。三尊にはあらず。初嵐 虫 虫聞、

虫壳。○此月夜に入て火を叢間に点じて虫をとる。これを虫

をふくといふ。とり得て後、紗囊籠中に養也。蚕 蟋蟀

「詩経」きりくす鳴や霜夜など詠るはみな蟋蟀也。今の俗

はこれをこほろぎといふ。ちぢる虫 きりくすの異名也。

筆つ虫 同上 叩頭虫 蝨斯 促織も又同じ。皇蟲

蟻 今の俗これをばつたといふ。蜻蛉 「和名抄」或俗

作蟬未詳。鎌虫 馬追虫 蚕に似てちひさし。秋の

蝶 秋の螢 「伊勢物語」とぶ螢雲の上までゆくべくは秋風

ふくと雁につけこせ。残る蚊 蟻 松虫 鈴虫 おのく

めいろなるはず虫也。賀茂の神官、虫えらみして禁裡院中へ奉ることふるくよりしか也。関東にてはとり違て覚侍り。

〔年山紀聞〕(百五十七ウ) 蜻蛉かげろふ 『本草』に云、一名は

胡黎。和名、加介呂布かげろふ 『和名抄』 胡黎まほば 崔豹が『古今注』

に云、一名は胡離、和名木恵無波、蜻蛉の小にして黄なるもの也。〔和名抄〕今の俗はやんまといふ。又今かげろふとい

ふ者は、胡黎の最小にして池辺に飛ぶ者也。古かげろふ

といふ者は、今いふとんぼう也。 蛸はうこう 蠖はうしゅう 『和名抄』小蟬

也。 秋津虫 蜻蛉の一名也。 蛾はらう 茅蛸也。一名は蠶れつ、和

名比久良之。『和名』 冷麦 あつ麦 西瓜 一名は寒瓜。○

大元の世祖、西域を征するの後、此種中国に入る。〔五雜俎〕

兼三秋物 竜田姫 秋の野山を守る神。 律の調 千秋

楽、万秋楽、秋風樂。 霧きり 霧の海、霧の笹、朝霧、夕きり、

胸の霧、霧雨。 霧句きり 『日本紀』第一に云、伊弉諾尊

曰、我生ところの国、唯朝霧ありて薫これに満る哉。霧も句

ふ者也。 霧たち人 遠くなり行人をいふ。 露つゆ しら露、

露けき、上露、下露、露の玉、袖の露、おく露、浪の露。波

の露、『増山の井』に出たり。 泪の露の誤歎。袖の露はなみ

だ也。(百五十八オ) 身に入 冷ひや 良寒 肌さむ 爽気さわやか

月 月の霜、月の雪、月の水、しまばし。 月の桂かづち 月中

に桂あり、高サ五百丈。下に一人あり、常にこれを斫る。樹

は創削ひて合す。その人、姓は呉、名は剛、西河の人、仙を

学ぶ。 過ありて謫して樹を伐しむ。〔西陽雜俎〕月の桂の

花は光をいふ。〔八雲御抄〕 桂かづち 桂かづち 事は前にみえたり。

『墜囊抄』『太平御覽』等の説、又これに同シ。 さゝらへ男

月をいふ也。 照る月次 和歌に月を詠ずること、照るをか

くしてよめり。『古今集』に、源の順が歌、水の面に照る月

なみをかそふれはこひよ秋の最中也けり。これは照る月な

みとかけていへるなれば難なしとぞ。 新月あらたま 韓退之かんたいし 詩に、

新月似た磨すり 鏡 といへるは三日月也。 白楽天が三五夜中

新月色、これ十五夜也。 弦月 凡七八日を上弦とし、廿

二三日を下弦とす。 三日月 朏ひらなり。 玉兔 月三日に魄

をなし、八日に光をなす。 蟾蜍ていなりつち 体就穴鼻(百五十八ウ) へ穴

は決也。穴鼻は兔をいふ 始て萌す。〔易乾鑿度〕玉兔蟾蜍

遠とほ 不し 知ら 『白氏文集』 銀兔 清露冷浸銀兔影。〔隋煬帝詩〕

引ひ 玄兔うらぶ 於お 帝台ていだい。〔謝莊月賦〕 玄兔 靈兔 素月抱かか 玄鳥、

明月懷か 靈兔。〔傳玄〕 月中に兔と蟾のあるは何ぞや。月は

陰也。蟾蜍は陽也。而も兔と並明也。陰の陽に繋る也。

〔五經通義〕『法苑珠林』の説略ス。 在明まへ 十五日以後のよ

し、匡房の『往生伝』にあり。〔八雲〕有明の月は、暁かけ

てよぢ出る末の月にて候。廿日よりうちの月も残る月におよ

びては在明と申べきよし、先賢申伝候なり。〔桂明抄〕

哉生明 哉は始也。前の月大なれば初二日明始て生じ、前月

小なれば三日に明初て生ス。 既望きぼう 十六日の月也。〔書經

秦誓註〕日月相望あひまむ、これを望といふ。既二望月は十六日也。

〔蔡氏集伝〕 哉生 魄はく 魂たま 尚書 十六日也。月の照らさる

所を魂(マタ)といふ。既生きせい魂たま。「同上」十七日なり。暉素きそ

「文選註」月光也。金波きんぱ。「前漢書」同上。月の暈かま。立待たちまち

月十七夜也。「藻汐艸」一説に立待は七夜まちとて、和俗

十七夜より廿三夜まで七観音の(百五十九オ)会日に配当し

て、月待の本地ほんちく供を修す。十七夜には立待と称して、月の出

るまで供せずして拝するよりいへり。居まちもこれに准じて

するべしといへり。居待月十八日也。「藻汐艸」臥待月

ねまち、ふし待廿日の月也。「八雲」「源氏若菜下」永徳のこ

ろ、為重卿廿日月といふ題にて、かぞふれば廿日の月の臥ま

ちも猶背の間は過て出にき。○臥まち月を「八雲」に廿日月

と遊され候へども、望月によりて廿日月に詠んは不審なく候

へとも、月の百首題などには十九日の月なり。「桂明抄」又

一説に、臥まち月は十九夜の月也。亦寝待月ともいふ。廿

日亥中 廿日の月亥の正刻に出ツ。更まち月 廿日の月也。

「藻汐艸」常娥じやうが、不死の薬を西王母に請ふ。姮娥けいご、竊み

服して月中に走る。「淮南子」嫦娥は羿が妾也。不死の薬を

偷て月中に走る。これを蟾蜍かみづかといふ。「天文志」真如の月

清淨真如しやうじやうは雲外の月の如し。「法花玄義」衆生の真如しんじゆ仏性は

常に煩惱に包れながら、その体も少しも染らす汚ず、喩は月

の雲に(百五十九ウ)掩れても、月の体は常に清く明らかな

るが如し。これを真如の月といふ。真とは不安の義、如とは

不異の義なり。真の故に一切の妄想を離れ、不異の故に我他

彼此の差別なしとぞ。心の月 胸の月 共に清きこゝろ也。

○観想 我心月輪上有二梵字。「十八道行用」盃の影 盃

の光などよそへたらは秋たるべし。表の月を待ツ。「御傘」

月の鼠 黒白の二鼠あり。互に樹根を齧、及至樹根は命に喩

へ、黒白の二鼠は昼夜に喩ふ。「譬喩経」無常の喩に、人虎

に逐れて野中の井に陥らんとして、岸の草をひかへ、底をみ

れば、毒蛇口を開きて飲んとす。又、黒白の二鼠かはるく

この草の根を食ふ。せんすべなくて毒蛇の為に害せらるゝと

也。是、虎は平生造悪の罪業、黒白の鼠は日月の過る也。こ

れを月の鼠といふ。『楼炭経』の文也。「奥義抄」月の劍

三日月の形を刀劍にたとへたる也。又満月を璧にもたとふ。

月の都 月宮殿 羅公遠、開元中、玄宗に侍して宮(百六十

オ)中月を翫ぶ。公遠云、月中に至らんと要するや否。則

ち杖を取りて空に向ひて擲。化して大橋となる。その色、

銀の如し。請て同じく登りゆくこと数里、清光目を奪ひ、寒

氣人を侵す。遂に大城闕に至る。公遠云ク、此月宮殿なり。

仙女数百を見る。素練寛衣にして、広庭に舞ふ。帝問フ、是

何の曲ぞ。曰ク、霓裳羽衣の曲也。「逸史」真夜中 廿三夜

也。子の二刻に出て、午の二刻に入る。子は夜中也。椎柴

椎の葉 椎の実 榎 榎と正木のかつらと杜仲とその子相似

て分別しがたし。葉は正木のかつらと杜仲に似て大小あり。

榎には似ず。正木のかつらは篤信の説にしたがふべき歟。し

かれとも冷泉殿と宗砌のあらそはれしことあれば、強て穿鑿

せでもやみぬべし。『後撰』の歌、又俊頼の深山の落葉にて

木の部に定らるゝといへれば、いよく杜仲の一種、蔓生のものであるべし。或人云、蔓生にて木に倚て登れども幹太く草に類せず。木の属也。日光山近辺の林に往々ありとそ。芒

『和名抄』に薄をすゝきと訓ず。しかれども『楚辞』注に、草木交日薄とあれはいかゞにや。(百六十ウ) 薄

「和名抄」 鬼芒 時珍云、葉茅の如くにして長サ四五尺、甚快利にして人を傷ること鋒刀の如し。 縷芒 葉の面、縦に白文あり。 鷹の羽すゝき 篠芒 しのすゝきはしげき芒也。しのに物思ふと詠るも、しげく物思ふ也。宗祇説に、しのぶ芒にて穂に出ぬをいふといふは誤也。 簾芒 花すゝき

敷。 「袖中抄」 はた芒とは穂のかたち旗をさゝげたるやうなるすゝきをいふと能因申ける。 「万葉裏書」 十寸穂の芒 穂の長くて一尺ばかりあるをいふ。ますかゞみを 『万葉』 に十寸鏡と書るにて心得べし。 「無名抄」 麻芋穂の芒 ますほの糸 真麻のこゝろともいふ。又すとそとかよへは、ますほ、

ますほ共に同じ。 『堀河百首』 俊頼朝臣の歌、花すゝきまそほの糸をくりかけて絶ずも人をおもほゆる哉。すゝきの穂の長て、糸などの乱れたるやうなる也。 『無名抄』 にも此歌を引り。 ますつこの芒 真の蘇枋といふこゝろ (百六十一オ)

なり。色ふかき芒の名にや。 ○越前色の濱にて詠る、西行、汐のまにますうの小貝拾ふとていろの濱とやいふにやあらん。

「無名抄」 蔓の葉 忍草 忍草、同荅也。檜の葉に似たるをしのぶ草といふ。一ツ葉に似たるを忘草といふは常

也。されど、さのみ草の形などをたづねて詮なし。只一草二名也。この分にて置べし。 「玄旨闕疑抄」 『大和物語』 には忍忘草同物といへり。但わらくとあるはわすれ草也。業平がこはしのぶ也といへるも、別物とこゝろうべし。忍は細長にして、星のやうなる物のある也。 「八雲」 星のあるは一ツ葉に似たるものなり。四時凋まず。わらびに似たるは冬枯るゝ也。今益に盛て簷下に釣もの是也。 薫 松蘿又おなし。

草花 色草 秋の千くさ也。 野の花 芭蕉 弁慶艸 鶏頭

花 苜蓿 隔来紅 鬼燈 番椒 若烟草 東埔塞瓜 (百六十一ウ) 布瓜 南瓜 冬瓜 かもは毛氈の和名也。この瓜、

冬に至れば白毛ありて氈に似たり、故に名づく。 狗尾草 薑 今の姜の字を用ひ、 剩 我の音とす。いまだその出所をしらず。 「和三」 芋 芋魁、芋の子、青芋、唐の芋、

螺芋。 蓮芋 水中に生ずるもの。 栗芋 蓮芋の一種、圃に生ずる也。 薯蕷 はじめ唐の代宗の諱預を辟て薯蕷と改む。又英宗の諱署を辟て山薬と改ム。 長芋 薯蕷の属也。 零余子 薯蕷の子也。 黄独 今俗誤りてこれを

何首烏といふ。 牛房引 菓 榎の実、榎の実。 団栗 柿 烘柿 青き時、器中に入れ置キ、自然に紅熟す。 甘こと蜜

の如シ。 「庖本」 酥柿 十夜柿 毎年、京誓願寺真如堂十夜

の法事中、盛に行はる、故にこの名あり。 洪柿を以石灰 (百六十二オ) 或は蕎麦糶の灰汁に浸し、一三日にしてとり

出して食ふ。 味ひ甘に變ず。 下品也。 白柿 洪柿を以枝を

つらね、或は糸に繫て晒し乾す。はじめ蕎麦から、稲藁を用いて宿してよく霜を生ず。預州西条の産、甘美也。備州これに垂。濃州及び尾州の蜂屋柿は長サ三四寸あり。胡盧柿豆柿 同上 干柿也。山城宇治に出ツ。木練柿 撰州いめし、京御所柿といふを以木ねりとす。御所柿 大和の御所村より出ツ。樹淡の上品なる物。木淡 似柿 御所に似て少し劣れり。伽羅柿 形小にして長く筆の形に似たり。田舎柿 是塔柿歟。形円く大にして味淡し。よりて酥柿とする也。透徹柿 形長く円、少し尖、肉中沈香理の如くにして味ひ甘美、是も伽羅柿の属也。円座柿 形大に肥、円く蒂の附とごころ肉起り塊をなす物。樽拔柿 是酥柿也。関東の俗、これを樽拔といふ。蓋酒樽中に入れ置て(百六十二ウ) 渋を脱の謂なり。君遷子 葡萄柿 上に米粉を和し、糗蒸をなし、小兒に与ふ。食して下血・下利を止む効あり。「和二三」柿膾 猿酒 猴、菓を取りて山中樹木の虚、或は崑腹の凹なる所に貯へ置、数日の後熟して酒の如く味甚だ甘美也。これを猿酒といふ。獺者、往々見て竊食ス。梨子 犬殺 「和二三」その大なるもの周り一尺四五寸、北国尤多し。奥羽秋田の産、他州に倍す。狗、樹下にありて梨子墮中るときは忽死す、故に名つく。紅瓶子梨瓶子の形にて赤く、その肉白し。観音寺梨 近江の芦浦観音寺より出ツ。微しく赤く、甚大ならず、漿多し。味甘くし

て、口中消るが如し。松尾梨 形観音寺梨に似て雪の如く、漿少く甘し。奥州会津の中松尾の産也。今洛の人家所々に接得て、頂妙寺柿と一雙とすといふ。水梨 (百五十三オ) 青梨に似て褐色也。梨に数種あれとも水梨、青梨に過ず。円梨 青梨の種類にて、大く皮うすく色青して甘美也。空開梨 肥前の産、極めて大也。色少しく赤シ。その味ひ円梨に垂なり。をふの浦梨 学生、伊勢也。歌にかた枝さすよし詠り。妻梨 具には軒のつまなしといふ。鹿梨 正字は白石李、蓋シ根槩は実の名のみ。その実大サ大豆の如し。これを食へは少しく梨の味ひあり。小兒、痘瘡鼻閉る者、これを以その鼻孔を穿つ。新米 新薬、初挽、今年米。稲干ス 稲拔、稲刈、稲舟、懸稲。田の色 田の庵 田を守庵也。小田守ル 山田守、晚稲守。そほつ 今の人玄賓僧都の事を假借して僧都と書は仮名遣へり。僧都はそうづ也。「古今集」にそほつとよめり。露雨に濡そぼつよりの名也(猶末に注ス)。鳴子(百六十三ウ) 鳥刳 引板 鳴竿 弾 「和二三」案山子 「伝燈録」○いにしへ三皇の世、人死て棺 榔殯葬せず。包に白茅を以し、これを中野に投。孝子、その禽獸の食をみるに忍ず、弾を作りてこれを守り、禽獸の害を防く。按ずるに、弾は案山子なり。田圃の中、草偶人をして弓を持しめ、以鳥獸を刳すもの也。○備中国湯川寺の玄賓僧都、迹を民間の奴にく



らまし、田に在て稲を守り、鳥雀を驚すを以業とす。今に至りて鳥雀を驚す芻。靈を僧都といふ。「和二三」○鳴子・引板は、鳥雀来るとき繩を以これを引ケは、鳴て鳥驚き去る。又『万葉拾穂抄』に、板に木を添へ繩をつけて引ならし、鹿をおどろかすものともいへり。○鳴竿は、躬恒『秘蔵抄』に、棹の先に鳴子を着、片山里に粟といふものを作り、猿を逐よしするせり。○そほつは、『古今榮雅抄』に、田のおとろかしにする人形といへり。或は添水など書は後の人のわざ也。古くは、そほつ或は曾富津など書り。「和二三」の説は附会也、とるへからず。焼帛 馬の尾を焼て田に棄れは鹿(百六十四オ)その香を嗅て田をはまぬなり。「枝折秋」鹿火屋 説々あれど、山田に猪鹿のつく所に小き屋作りて、塵埃何くれの嗅きものに火をくゆらし、烟をたてて鹿をやらひやると心得べし。或は香火屋、又置蚊屋など、字をかりて書る所もあるにより、まどふ人もあれど、用ふへからず。又火の字濁りてよみて、顕昭が飼屋の説に迷ふべからず、と御釈にあり。「牟山紀聞」木綿取ル 桃吹 綿実、桃の如く四ツに裂て、中より白綿を出す。これをもふくといふ。鹿 一千年にして蒼鹿となり、又百年にして白鹿と化し、又五百年にして玄鹿となる。「格物論」かせき 「日本紀」鹿をいふ。○『秘蔵抄』に、すゝかとは牝鹿をいふ。すがるとは牡鹿をいふ。『奥義抄』にすかるとは鹿をいふ、二云。又さそりといふ虫をすがるといふ。『万葉』、春されはすがる鳴野のほとゝ

ぎすはとく、妹にあはずきにけり。是蜂也。『八雲御抄』に、蜂をもすがるといへど小鹿を以本説とす。愚按ずるに、諸説此の如しといへども、みな誤にや。契沖うしの『雑記』に云、鹿はしゝともかせきともいへり。しか、かせき、共に『日本紀』に見えたれど、歌にはしかとのみ詠り。すがるはさそりと(百六十四ウ)いふ蜂なるを誤りて鹿とおもへり。『日本紀』第十四に見えたり。加茂翁の『頭書』に云、今歌集にすがるなく秋の萩はらとあるは、蝶嵐鳴てふ語を誤りてなくと書しより、後の人はかゝることはしらねば、萩につきてすかるは鹿ぞといへる也けり。『万葉』に、すがるなす野のほとゝぎす、とあるにてしらる。『万葉』に、なすといふ語に成、鳴などの字をかりたるをしらで也。『紀』に、如五月蠅をさばへなすとよむは、『古事記』に五月蠅奈須とあるを以也。是にてしるへし。○『古今集』よみ人しらず、すかる鳴秋の萩原霧たちて旅行人をいっかとはまたん。狭牡鹿『和名抄』に、牡鹿和名佐乎之加。○『顕宗天皇紀』に、牡鹿、此に云フ左鳴子加、和訓の意狭牡鹿にて、狭は狭山・狭野など、添ていふ詞也。「和字正濫要略」馬琴云、今の人、小男鹿、棹鹿に作る。『万葉』第八に、棹牡鹿、竿牡鹿などありて、棹、竿ともみな佐の訓に借りたり。又同集に、小牡鹿と書るはちひさき鹿といふにはあらず。小は添ていふ詞なり。今は小なる鹿とおもふ人おほかり。夢野の鹿 『撰津国風土記』に云、雄伴郡に夢野あり。父老伝へていふ、昔刀

我野に牡鹿（百六十五オ）あり。その嫡と此野に居る。その妻の牝鹿、淡路国野嶋に居る。彼牡鹿、屢野嶋に往て妾と相愛す。既して牡鹿來りて嫡の所に宿す。明旦、牡鹿その嫡に語りて云、今夜吾背に雪零おけりと見き、又ひつ、すき草生たりと見き、此夢何の祥ぞ。その嫡、復夫の妾の所に向往へきことを悪ム。乃ち詐り相して云、背の上草生るは、矢背上に射るの祥、又雪零は白塩穴に塗の祥。汝淡路嶋に渡らば、必ス船人に射られて海中に死ん。謹で復往ことなかれ。その牡鹿、感恋に勝ず、復野嶋に渡る。海中行船に逢遇、終に射死さる。故に、此野を名づけて夢野といふ。俗説に、刀我野に立る真牡鹿も夢相のまゝに、二云云。契冲うし云、『仁徳紀』に、菟餓野の鹿の夢の事はあれど、それより夢野といふよりはみえず。これによりて夢野ともよむべし。〔河社〕 肩拔鹿 匡房卿の歌に、かく山のは、かゞ下にうらとけて肩ぬく鹿は妻こひなせそ。『旧事紀』第二に二云、復令中臣 祖天兒屋命 忌部祖天太 玉命、内 拔天香久山之真牡鹿之肩、而取天香久山之波波加、而令占矣。『古事記』の説、これにおなじ。神代には鹿の肩骨を（百六十五ウ）抜てうらなひける也。は、かの木は、『和名抄』に二云、桜桃一名朱桜（和名波々加、一名爾波佐久良）。『延喜式』に云、凡、年中御下料、波々加木皮は、大和国有封の社に仰て採てこれを進らしむ。紅葉鳥 〔蔵玉〕 十六 〔万葉〕 斑龍 錦馬 共に鹿の異名也。 鹿笛 獵者、鹿をとらん為に笛をふ

き、鹿の声をまねびて、牡鹿を導く也。鹿笛、その形銀杏の葉の如し。鹿の袋角を以これを作り、掩ふに鹿の腹こもりの皮を以す。乃ち小竹篋の如きものに糸を附けて、笛の前に繫ぐ。その吹んとするときに、篋を以笛の内を払ふ。是露払歟。左右の指を笛の両脇に着、おしたはめるが如にして、これを鳴らす。その笛の音を聞て牝鹿也とし、牡鹿の來り、うたる、也。牝鹿はきたらず。鹿垣 鹿を田圃へ入れじとて、垣をするなり。鹿狩 伏羲氏、人にをしへて始て狩をなさしめ、禽獸を驅逐ふて、その害を除けり。そのうち、賢王相續て四時田獵して、民の害をすくふ。本朝、雄略天皇かつらき山に狩して、みづから大鹿を獲給ひしに、草香幡梭姫（雄略の后）これを諫め給へは、帝悦て（百六十六オ）人はその獸を得つ、朕はその美言を得し、とのたまひしことなどあり。藻に住ム虫 和布のりなどに付たる小海老やうのもの、あり、これをいふ。〔勢語註〕 われからとは、蟹の刈藻につきて、この虫我からと身をほろぼすより名つくる也。〔采雅抄〕 約言にいふ所、古歌に詠ずるわれからなるべし、藻に付て殼の一片なる螺あり。分殼の意也。〔大和本草〕 われからは雑也。鳴といへは秋なり。〔増山井〕 蚯蚓鳴ク 孟夏始て出、仲冬蟄結す。雨ふる時は先ツ出ツ。晴るゝときは夜鳴く。或はいふ、結する時よく化して百合となる。 蟲蝨と穴をおなじうして雌雄となる。故に郭璞が賛に云、蚯蚓土精無心虫、交以不し分、蟲蝨に睡、これ也。今、小兒陰腫るゝこと

あれは、以この物に吹るゝとす。「経験方」に云、蚯蚓人を吹く形大風の如し。眉鬚皆落つ。蓑虫鳴ク 父恋し 是みの虫の声也とぞ。蓑むしと斗は雜也。 鳴 正字は鶯、一に田鳥に作る。今俗、混合して鳴とす。「和三」に云、鳴に四十八品あり。○真鳴○ほど鳴○胸黒鳴○黍鳴○黄脚鳴○京女鳴(百六十六ウ)○羽斑鳴○杓鳴○山鳴○遠首鳴○木雀鳴○草鳴等、みな其中の名也。 鳴の羽搔 鳴は羽を搔ことのしげきもの也。百羽かきとはいふ也。「奥義抄」「古今」、暁の鳴の羽かき百羽かき君がこぬ夜はわれぞ数かく、詠人不知。 鶉 ○鶉籠○鶉籠○蝦蟇化して鶉となる。「淮南子」鶉にあひふといふあり。形小さく脚短し。是雌なり、嘯らず。 片鶉 雌雄そろはぬをいふ。 鶉 衣 短き衣也。○子夏、家貧、衣懸鶉の如し。「太平御覽」 鶉 伯勞也。或は百舌鳥に作る。 鶉の草ぐき 鶉の早鶯 鶉の草ぐきとは、鶉の草ぐきるといふ也。「万葉」に、あし引の山べにおれはほとゝぎす木の間たちくぎ鳴ぬ日はなし。又、山吹ののしげみたちくぎ鶯の声を聞らん君をともしも。木の間たちくき、といふ詞に、具吉と書り、草具吉と同じ。彼は時鳥の木の間くぐるといひ、是は鶉の草ぐきと聞えたり。今按ずるに、此歌の心は、鶉は春はいとも鳴ざれば、鶉の草ぐきことはみえずとも、我は君があたりを見やらんとよめるは、只見えずといはん斗をとる也。「袖中抄」「仙覚抄」に、鶉は秋冬(百六十七オ)などは木草の末に居て鳴るが、春になり

ぬれば草の下に潜りてみえざる如く、君がをしへし栖も霞がくれに見えずとも我は見やらん、と詠るにや。○『万葉』作者不詳、春されは伯勞鳥の草ぐき見えずとも我は見やらん君があたりは。『奥義抄』に、昔ある男、野を行て女にあひぬ。とかくかたらひつきて、その家を問ふに、女、鶉の居たる草ぐきをさして、吾家のはか草ぐきのすけにあたりたる里にあり、とをしゆ。男、後に必ス尋ぬへきよしを契りて去りぬ。そのうち、心には思ひながら、君につかへまつりて、私をかへりみるにいとまなくて、ゆかずなりぬ。次の年、たま／＼ありし野にゆきて、教し草をみるに、霞ごとくく聳てすべて見えず。終日ながめ空しく帰りぬといへり。この『奥義抄』の説は、『万葉』の歌よりまうけなせし也。又草ぐきを草茎とおもひ誤りたる説あり。これらはすべて載ず。今按ずるに、『古事記』に自「我手候」久岐之子也、云云。この久岐之といふ詞は手の俣よりくぐりしといふこと也。草ぐき、是にてもおもふべし。又『万葉』に、鶉の草ぐき春によめれは、春ならんと思ふ人もあるべけれど、春くれば鶉の草ぐきるは見えぬとあるにて、草ぐき秋なること明らか也。(百六十七ウ)○鶉の早鶯は、『八雲御抄』に、鶉の杳直とは、わが身替りに、蛙やうの物をさして置也。これ、時鳥くつてをせむると也。馬琴云、『新撰万葉』に、ほとゝぎす鳴たつ春の山辺には杳直いたさぬ人や侍らん。くつていださぬ人とは、鶉をいふ也。是をもて思へは、鶉の早鶯は春の末、或は夏の

初なるべき歟、猶可し考。鱧すゞき 小なるを世せい以い古こといふ。六

七寸を波禰なみといふ。尺以上を須々木すずぎといふ。鯨けい 鱧なまこ これ

を九万匹といふ。越中に出るもの上品也。元これ唐山の魚に

して、唐船多く来たる時群遊す。来舶人帰帆らいはくきはんの時、他の国

の人肉食の腥にじみ氣きを慕ほひ、九州の鯛を船ふねにつ着つて帰かへる。故に、夏

日ひ鱧なまこ日本にっぽんに多く、冬月鯛唐土たうどに多しといふ。実じつにしかるや。

小瀑江鮒こたけえかな 鮒ふなのこ小こきを江鮒えかなといふ。或は名吉なきち、或は口女くちめ、又

伊奈いな、須走すそ、小さらし江鮒えかなといふ。鱧なまこ 鱧なまこ引ひ、裂臈れつらふ。

鱧雲なまこぐも 裂臈れつらふはいわしを裂ひて作つくる。この魚う、刀やうを用もちるに及およず。

指を以これを解と、故に裂臈れつらふといふ。いわし雲は、秋天鱧先あきなまこッ

よらんとする時、一片いっぺんの白雲あり。その雲段々だんく(百六十八オ)

として波のごとく然しかり。これを鱧雲なまこぐもといふ。今の女房詞に、

いわしをむらさきといふ。彼かれが肉にくの色いろよりいふにや。されど、

塩などしたるこそ紫にはあれ、生なまのは紫にもあらず。又略し

ては、おむらともいふ。後のちの人はすべて御の字をそふるを

めたしと思ふらめ、今の詞は何事もいやしうなりぬ、とあ

る物にいへり。鱧なまこ築つたまな この魚いし、雄おありて雌メなし。影を以

鱧魚なまこいしに漫まんする時は、その子こみな鱧魚なまこいしの鬢ひれにつ着つて生なず。故に鱧

鱧なまこといふ。『趙辟公雜錄』 秋七草 『万葉』 秋七くさの花は、

萩、尾花、葛の花、撫子、女郎花、藤袴、朝顔。 虫撰

『世談問答』に云、賀茂籠がもこりとて、虫入むしられ侍さむらいるは何の故に

賀茂より出侍でしるにや。答、是は殿上人の逍遙せうようとて、昔殿上人

ともの嵯峨野さかがのなどへ向ひて、虫を籠かごにえらみ入れて奉りしは、

堀川院の御時より始りける。虫撰むしせんとも申也。昔は賀茂の杜司

などに仰せて、松むし・鈴虫などを召れけるよし、故禪閣こぜんかくの

仰られしとかや。されば、昔は賀茂より出侍でしるとおもひ合せ

侍るさむらい堂上どうじやうの虫えらみ九月也。但一句によりて三秋にわたる

べし。(百六十八ウ)

八月 葉月とは葉落月の略也といへり。或は初月也。よみて

初来はつきとす。鴈かりの初はつて来きたるころなるよしいへり。又はつ

きは八月也。八の字をはの音によむは常のこと也と。此説

にしたがふべし。

南呂 律 白露 節 処暑の後十五日、斗庚に建たをいふ也。

秋分 中 白露の後十五日、斗酉にさすをいふ也。

仲秋 「月念」 竹春 「笥譜」 壮月 「纂要」 中商 「同書」

中律 出所未考。 難月 同上。『唐類函』に、八月儺して、

以秋風に達たつすとあり。儺月の誤りにや。 秋風月 「感玉」

月見月 「同上」 燕六月 雁来月 八月鴻雁来ル矣。 「月念」

八朔 八朔梅 特怙たのむの節 憑たのの節せつ供く(百六十九オ) この節、

田の実みのるを以、田の実みのの節とす。いにしへは、稲の切穂を

禁裏たてまつへ献たまれり。故にこの名ある歟。又今日、君臣・朋友慶

賀がす。よりにて田のみの訓よをかりて、頼たのの節せつとすといへり。

『公事根元』に云、八朔の風俗は、後嵯峨帝せむりう潜龍ひそかの時、外戚

源道方みなちかた卿きやうの亭ていに在おはせしに、近従きんじゆうの男女、私ひそかに此義このぎをなして、

閑素ひそを慰なぐさめ奉たごる。その後、即位すゐし給たまひても、嘉事かじとしてこの

事あり。或はいふ、後深草院、建長年中より始まる。新穀しんこくを

折敷をしま或は土器かからげに盛り、迭たがひに相贈りあひあはせ、称て田の実といふ。『園大曆』に云、光明院康永三年八月一日、今日風俗に倣ならひ、雜品物流布ざんぷんりゅうふ、関白以下献物けんぶつあり。一条禅閣兼良公、明応二年の記に云、今日各物品を主人に捧たぐぐること、古来いまだこれを聞ず。三十年來のことあるを聞、云云。禅閣の記によれば、寛元年中始て行れ、その後中絶して、又寛正中中再興ありしものなるべし。○『弁内侍日記』宝治元年（八十代後深草院年号）の下に云、八月朔日、中宮の御方よりまいりたりし御たき物、よのつねならずうつくしう侍りしかは、けふは又そらたき物の名をかへてたのめはふかき匂ひとぞなる。為章云ク、此内侍の歌（百六十九ウ）そらたき物とたのめは深きとにらみ合せたり。されはたのむの節といふこと、この歌に見えたり。『梅松論』に、足利尊氏卿の、心ひろく物をしみの気なきをいふ所に、八月一日などに、諸人の遺物数しらずありしかど、みな人に下し給ひし、云云。『年山紀聞』○八朔梅は梅樹の一種にして、この節花開く故にこの名あり。尾花の粥かゆ 『大内記 田原康富日記』、文安五年八月朔日乙卯、云云。尾花の粥の事、その由来何事なるや、自然見及ぶかのよし、問しめ給ふ。いまだ見及ず、その子細をしらず候よし、返答し畢る、云云。○八月朔日、小花粥。内裏・仙洞以下、令用給良葉、云云。彼粥調法、薄里焼し粥入合也。『海人藻芥』 絵行器えかひ 京の俗、八月朔日に、家々の乳母、その養ふ所の女兒に行器一双を贈る。その行器の中に、柿井に

藤の花を盛る。藤の花は白糸餅あつぎに赤小豆を点じたる也。この餅もちの形、戻る白糸に似たり。故にしら糸と称す。又深更と名なづく。女子、赤小豆を呼であかといふ。又物に点するをくといふ。是あかつきの義をとりて、深更と名づくといふ。今日、童の戯あそびに松かさまつかさを以雉子けいこを造り、或は烏賊いか（百七十オ）の甲を以鷺鷥さぎざぎを造り、或は糸架いとかけを以金灯笼かんとろうを製し、又綵いろいとを以雀を造り、草の実をとりて瓢ひさしの形を作、桃仁とうにんを刻て松虫まつむしを作る。亦意苡仁いじんを枝ながら折て行器かひと、もに相贈る。京の俗、みな祝ひ物とす。○八月朔日を臘ろうとす。俗これを臘臘ろうろうといふ。『月令広義』

注

「日本文学研究」第四十八号、同第五十六号、大東文化大学日本文学会、二〇〇九年二月、二〇一七年二月。